

〈抄 録〉

## 「英語で授業を行う」ことに関する研究(3)

— 中学生の意識調査分析 —

保 坂 芳 男

### Abstract

The course of study (2009) has required English teachers to use only English in class at high schools, in principle. As Watari (2011) mentioned, there is little empirical research on teaching English through English (TETE).

In the previous study I did some research on TETE with a focus on high school students at the middle level (2017) and at the top level (2018).

This time I focused on junior high school students because the course of study (2017) has also required English teachers to use only English in class at junior high schools, in principle.

The questionnaire was developed by Mr. Uenishi (2011). I revised some to fit my research design. Firstly, exploratory factor analyses were conducted after collecting the data. Then three factors were yielded. They are as follows: Environment, Review and Explanation. Secondly, a *t*-test was conducted to clarify the difference between male and female students. Thirdly, ANOVA tests were conducted using majors, interest, or proficiency in English as independent factors.

The results have shown that the students with higher interest in English prefer teachers using TETE. TETE may have more influence on motivation of junior high school students than that of high school students.

キーワード：TETE, 中学生の意識調査, 因子分析

## はじめに

2009年に高等学校学習指導要領（外国語）が告示された。この学習指導要領は、2013年から学年進行で実施され現在に至っている。

さらに、2017年には中学校学習指導要領（外国語）が告示された。これは、2021年度から全面実施の予定である。

この2つの学習指導要領に共通しているのは、「授業は英語で行うことを基本とする」である。

筆者は大学で教員養成に携わっており、毎年、都内の中学、高校の教育実習を訪問する機会が多い。告示当初は、喧々諤々とした議論をよく聞いていたが、最近では、以前と余り変わっていない日本語主体の教育現場を見ることが多いように思われる。また、最近、よく聞くのは、教育委員会の視察等が入る時は英語でやるが、普段は今まで通りに日本語中心の授業であるということである。

筆者は、毎年、中学高校の教員を対象に教員免許更新講座を行っているが、「英語が不得意な生徒には無理」とか、「受験が変わらなると無理」と言った意見が依然、根強く残っていると感じている。

中高の英語教育は、上記のように二重構造を維持して行われているようだが、中高の英語教育の主役は、生徒ではないであろうか。そうだとすれば、「英語で授業を行う」ことに関して、当事者の生徒はどう考えているのか、調査する必要があると思い、本研究を始めることにした。

また、亘理（2011）が述べているように、授業を英語で行うことが効果的であるということは実証されていないことも本研究を継続的に行っている主な理由の1つである（p.34）。

一昨年は中堅レベルの高校を対象に、昨年はトップクラスの高校を対象に研究を行った。今回は、2021年からは中学校でも「英語で授業が行う」

ことが予定されているので、本研究では中学生を研究対象とした。

## 2. 先行研究について

### 2.1 高等学校学習指導要領 (2009)

高等学校学習指導要領 (2009) が高校の英語教師に「授業は英語で行うことを基本とする」と決めた理由は以下のとおりである。

英語に関する各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする。

告示当時反響が大きかったので、『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』(2010) には以下のような説明がある。

訳読や和文英訳、文法指導が中心とならないよう留意し、生徒が英語に触れるとともに、英語でコミュニケーションを行う機会を充実することが必要である。(略) これらのことを踏まえ、言語活動を行うことが授業の中心となっていれば、文法の説明などは日本語を交えて行うことも考えられる。(p. 50)

英語はコミュニケーションの道具であり、日本の言語環境の中では英語を普段使う機会が少ないので、せめて学校現場ではできるだけ英語を使って欲しいということである。ただし、文法の説明等は日本語を交えて行っても良いが、日本語だけの授業は不可であるということである。

## 2.2 中学校学習指導要領 (2017)

中学校学習指導要領 (2017) が、今度は中学校の英語教員にも「授業は英語で行うことを基本とする」と決めた。その理由は、高等学校学習指導要領 (2009) と全く同じである。

しかしながら、2018 年に出された『中学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』には、高校のとは異なった説明がされている。

中学校でも同様の規定を盛り込むのは、小学校の外国語活動における教師や児童の豊富な英語使用の実態や、それを経験した児童の英語が使えるようになりたいという学習意欲の高さを中学校での学びに生かすためにも、このような環境づくりが重要だからである。(略)

生徒が自分の英語に対して自信を持って堂々と使っていけるようになるためには、授業で触れる教師の英語使用に対する態度と行動が大きな影響力を持つ。だからこそ、(略) 教師の積極的な英語使用が求められるのである。(p. 87)

ここで求められているのは、小中の連携、英語使用モデルとしての教員の姿勢である。そして、以下の断りが追記されている。

「授業は英語で行うことを基本とする」のポイントは、前述のとおり「英語に触れる機会」と「実際のコミュニケーションの場面」であり、そうした趣旨の授業展開であれば、必要に応じて補助的に日本語を用いることも考えられる。(同上, p. 87)

では、ここで言う「必要に応じて補助的に日本語を用いること」とは、具体的にはどういうことなのだろうか。これも本研究の目的の1つであ

る。

### 2.3 上西 (2011) より

上西は、以前高校の教員であった利点を生かし、いち早くこの問題に取り組んだ。上西は2009年の高等学校学習指導要領の告示後に、英語教師43名、高校生338名に質問紙調査を行った。その結果、以下の2点が明らかにされた。

- ① 高校1年生と2年生を比較した場合、1年生は全体的に英語での授業を希望しない傾向にあった。一方、2年生は、受験との関連が高いと思われる項目（文法説明など）は英語での授業を希望しない傾向にあった。
- ② 「英語授業を英語で行う」ことに対して教師と生徒の意識には共通点が見られ、全体的に否定的な考えを持っている。しかしながら、教師は、授業内容に関係ない場面では英語使用を肯定的にとらえている。

### 2.4 Shin (2012) より

韓国における大変興味深い調査研究である。Shinは、韓国の高校の英語教員で、勤務当初は英語での授業を意欲的に行っていたが、しばらくして母語（韓国語）の授業に切り替えた若い英語教員16人に調査を行った。対象は、勤務3年未満、英語力がNS並みに高い高校の教員である。

対象者の英語教員のうち9人は、1か月以内に母語による授業に切り替えている。その理由は、生徒が授業を理解できない（15人）、進路が遅れる（14人）、教室の管理が難しい（11人）であった。英語教師の英語力不足を原因にあげた教員は誰もいなかった。

## 2.5 SLA 研究より

SLA 研究の分野での TETE に関しては賛否両論である。この点に関しては、上西（2011）が丁寧によくまとめている。上西が「『語学の授業を目標言語で行う』ことに関して、多くの学者・教育者がその意義や問題点等について研究を行っている」（p.116）と言っているように、賛否両論、百花繚乱である。

Atkinson（1993）は、英語力の低い学習者には L1 使用が効果的であるとし、「内容理解の確認、発話の促し、簡潔な指示、理解度の確認、語の定義の確認、時間短縮のための翻訳」（pp.25-36）を例として挙げている。

一方で、Harbord は、Atkinson の考えには賛成できず、指示を L2 で行うことや L2 で教師と生徒が交流することが理想的な L2 習得方法であると反論している（Harmer, p.132）。

また、Brown（2007）は、研究や経験からして「English only」の度が過ぎているのではないか、他方で、EFL 環境では教師が母語を使いすぎることも問題だと指摘している（p.247）。Brown は、学習者の母語使用はひとつの選択肢であるとし、そのメリットについて以下の 5 点を挙げている（p.118）。

- ① 躰や教室管理上の問題
- ② 活動の説明について
- ③ 文法項目の簡潔な説明
- ④ 生徒が意味を混乱している単語の簡潔な説明
- ⑤ 文化に関するコメント

## 2.6 巨理（2011）より

巨理（2011）は SLA 分野の多くの研究を分析する中で、高等学校学習指導要領が目指す「英語で授業する」ことにはむしろ弊害が多いとし、以

下の3つの警告を鳴らしている (p. 39)。

- ① 英語で授業をしたからと言って学習者の英語使用が増えるわけではなく、L1の使用がむしろコミュニケーション活動を円滑にし、英語使用を促す可能性がある。
- ② コード切り替えは二言語話者同士にとってごく自然な振る舞いで、実際には授業の中でも性質の異なるいくつかの用途でL1が用いられていることにもかかわらず、教師の多くが不要な「罪の意識」を感じており、新指導要領の要請はその意識を強める可能性がある。
- ③ 英語(だけ)での授業を要求することが、学習者の学習方略を狭め、教師の教育内容・教材構成を阻害する危険性がある。

## 2.7 保坂 (2017) より

普通程度の高校生の意識調査の結果、以下の5点が明らかにされた。

- ① 因子分析の結果では、2年生、3年生ともほぼ同じような因子構造が見られた。3年生の方がそれぞれの因子に収束した質問項目が多く、授業の多くの部分において英語で授業を行うことを望む結果となった。また、2年生が、最初に「すべて英語で」という意識が高い一方で、3年生は、「雰囲気」重視であった。
- ② いずれの場合においても性別による意識の差は見られなかった。
- ③ 進路に関しては、2・3年とも理系志望の学生は、「雰囲気」作りのための英語による授業を望んではいなかった。
- ④ 英語に対する興味に関しては、2・3年生も英語嫌い群が、英語での説明を避ける傾向が見られた。
- ⑤ 成績に関しては、2・3年生とも上位群が英語での授業を望む傾向

が見られた。

## 2.8 保坂 (2018) より

トップクラスの進学校に在籍している高校生の意識調査の結果、以下の5点が明らかにされた。

- ① 因子分析の結果では、英語の授業であるので「すべて英語で」やるべきだと考えている生徒が多いことが分かった。
- ② 教室英語使用に関しては、女子生徒の方が希望する傾向にあった。保坂 (2017) では、性による有意な差は見られなかったが、0校の特徴として、英語が好き (⑤~⑦) と回答した女子生徒は 51.6 % で、男子生徒 27.3% の倍近くである。女子生徒の方が、英語好きが多いことが原因であるかもしれない。
- ③ 進路に関しては、有意な差はみられなかった。
- ④ 英語に対する興味に関しては、英語好き群が、全体的に英語での授業を望む傾向が見られた。
- ⑤ 成績に関しては、有意な差はみられなかった。

2009年の高校用学習指導要領告示以降、「英語での授業」を研究テーマとした論文が多く掲載されている (山村, p. 79)。ただ、その多くは教員を研究対象とするもの (Takegami, 2016; 高木・酒井・加藤・福本, 2016; 土持, 2017) で、生徒対象の意識調査、特に生徒の属性 (男女, 英語に対する好感度, 英語の成績) との関係に焦点を当てた意識調査は、管見の限り、極めて少ないと思われる<sup>(1)</sup>。



### 3. 本研究の目的・方法

#### 3.1 研究の目的

本研究では、上記の先行研究を踏まえて、公立中学校の生徒がどのような場面で英語教師に TETE を望んでいるかを明らかにしたい。主たる本研究の目的は以下の2点である。

- (1) 中学生はどのような場面で英語で授業を行うことを望んでいるか。
- (2) 生徒の性別、進路、学年、英語に対する好感度、英語の学力によって意識に差はあるか。

#### 3.2 調査の実施

##### 3.2.1 被調査者

埼玉県にある T 中学校に、2018年3月に質問紙調査をお願いした。調査は中学校2年次の3月に行った。2年生132人(男子67人、女子64人、未記入1人)の回答を得ることができた。

##### 3.2.2 質問紙の開発

質問紙は、上西(2011)を元に、生徒のアンケート等を参考に修正を加えた保坂(2017)を用いた(資料1)。ただ、今回は保坂(2018)の反省を踏まえて、27番目に「英語の授業なので全部英語でやるのは当たり前」という質問項目を追加した(資料1下線部参照のこと)。また、生徒の属性として、性別、卒業後の進路、英語に対する興味、英語力(自己申告)を追加した。生徒の興味と英語力に関しては7件法(①全然そうではない)～⑦本当にそうである)を用いた。

資料1 質問紙

I. 被調査者について

もしよければ出席番号をお願いします ( )

該当するものに○をお願いします。

1. 性別

① 男子 ② 女子

2. 卒業後の進路

① 普通科高校 ② 商業・工業などの専門科高校  
③ 総合学科 ④ その他 (および進学しない)

以下の質問には① (全然そうではない) ~⑦ (本当にそうである) に1つに○をお願いします。

3. 英語に対する興味

私は英語が好きである。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

4. 英語の学力

私はこの学校において英語が得意な方である。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

II. 英語で授業をすることについて

以下の項目に関して、中学の英語の授業で日本人の教員がすべて英語で授業をやることについてどう考えますか。① (全く英語ではして欲しくない) ~⑦ (全部、英語でして欲しい) の1つに○をお願いします。

1 新しい単語を説明する時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

2 新出の文法の説明をする時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

3 生徒に様々な指示をする時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

4 日本や外国の文化について話す時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

5 授業を受けるルール (姿勢, マナーなど) を説明する時。 ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦

裏もあります。

- |                           |               |
|---------------------------|---------------|
| 6 生徒に課題(宿題)の説明をする時。       | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 7 英語学習等に関して生徒を励ます時。       | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 8 生徒に(小)テストを課す時。          | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 9 生徒に英文内容を理解させる時。         | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 10 生徒をリラックスさせようとする時。      | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 11 人間関係を作り出す(出そうとする)時。    | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 12 ゲームなど活動の説明をする時。        | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 13 前回の授業の復習をする時。          | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 14 本日の授業のまとめをする時。         | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 15 教師が生徒を注意したりする時。        | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 16 教師が体験談などの話をする時。        | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 17 今まで習った文法を復習する時。        | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 18 雑学やネタを言う時。             | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 19 最初の挨拶など。               | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 20 授業で習う内容の紹介をする時。        | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 21 複雑な英文の構造を説明する時。        | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 22 抽象的な内容を説明する時(より平易な単語で) | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 23 授業の重要ポイントを説明する時        | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 24 本日の授業の流れを説明する時。        | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 25 生徒が日本語で質問してきた質問に答える時。  | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 26 日本語と英語の構造の違いについて説明する時。 | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |
| 27 英語の授業なので全部英語であるのは当たり前。 | ①—②—③—④—⑤—⑥—⑦ |

ご協力ありがとうございました。せっかくのアンケートですので1枚も無駄にたくありません。記入漏れがないか再度ご確認をお願いします。お疲れ様でした。

資料2 因子分析の結果

	因子 1	因子 2	因子 3
Q10	<b>.612</b>	.099	.208
Q 7	<b>.604</b>	-.079	.170
Q11	<b>.601</b>	.246	.133
Q 5	<b>.575</b>	.182	.079
Q25	<b>.431</b>	.038	.088
Q18	<b>.415</b>	.343	-.042
Q17	.049	<b>.818</b>	-.042
Q13	.153	<b>.652</b>	.151
Q 2	.197	.177	.750
Q 1	.158	.106	.683
因子寄与率	18.8	13.7	11.8
$\alpha$ 係数	.711	.719	.719

## 4. 分析とその結果

### 4.1 因子分析

#### 4.1.1 因子分析の結果

2年生132のデータを用いて因子分析を行った結果、5回の反復で収束した（主因子法、Kaiserの正規化を伴うバリマックス法）。その結果、3つの因子を抽出することができた（資料2）。因子1に関しては、上位に収束したQ10、Q7、Q11は直接授業の活動に関する内容ではなく、生徒に対する働きかけに関する項目である。そこで、因子1を「雰囲気」と命名した。

因子2に関しては、Q17「今まで習った文法を復習する時」と、Q13「前回の授業の復習をする時」のみが収束したので、「復習」と命名した。

因子3に関しては、Q2「新出の文法の説明をする時」と、Q1「新しい単語を説明する時」のみが収束したので、「説明」と命名した。

F1：雰囲気 (分散率：18.8% ,  $\alpha = .711$ )

F2：復習 (分散率：13.7% ,  $\alpha = .719$ )

F3：説明 (分散率：11.8% ,  $\alpha = .719$ )

#### 4.1.2 因子分析の結果の考察

高校生を研究対象とした保坂(2017, 2018)と比べて、F3「説明」因子に収束した質問項目が極めて少ないことが特徴である。普通程度の高校生を研究対象とした保坂(2017)では、第一因子に、Q26を含めて4項目(Q21, Q17, Q2)も収束しており、すべて文法指導に関する質問項目であったので、文法指導も含めてすべて英語でやって欲しいという意識の表れであると解釈を行った(p.101)が、中学生を対象とした今回の調査では、すべて英語でやることは望んでおらず、難しい英文の構造等の説明等では日本語での補助を期待しているようにも考えられる。トップクラスの高校生を研究対象とした保坂(2018)では、保坂(2017)以上に第一因子に多くの質問項目が収束したが、中学生の場合、全く異なった結果となった。

さらに、先行研究(保坂, 2017, 2018)と比較した場合、中学生の場合には、「紹介」因子や「すべて英語」因子が抽出されなかったことが特徴的であった。

#### 4.2 *t*検定の結果

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を従属変数とし、性を独立変数とする*t*検定を行った。その結果、どの因子においても有意な差はみられなかった( $p < .05$ )。

### 4.3 分散分析の結果

#### 4.3.1 進路による比較

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を従属変数とし、進路先を独立変数とする1要因(4水準)分散分析を行ったが、有意な差は見られなかった( $p < .05$ )。中2の段階では、圧倒的に普通科高校への進学を考えている生徒が多いためであると思われる(96.2%)。

#### 4.3.2 英語に対する好感度

7件法(①全然そうでない～⑦本当にそうである)で、英語に対する好感度を生徒に尋ねた。「嫌い群」36人(回答①～③)、「普通群」44人(回答④, ⑤)、「好き群」52人(回答⑥, ⑦)であった。

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を従属変数とし、英語に対する好感度を独立変数とする1要因(3水準)分散分析を行った。その結果、以下の3点が明らかにされた。

- ① F1「雰囲気」において、主効果が認められた( $F(2,129) = 9.17, p < .001$ )。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語「好き群」は、「嫌い群」と比べて、授業の雰囲気を盛り上げるために、英語で授業をやりたいと思っているという結果となった( $p < .05$ )。
- ② F2「復習」においても、主効果は認められた( $p < .05$ )。
- ③ F3「説明」においても、主効果が認められた( $p < .05$ )。

F2, F3の両因子とも、ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語「好き群」と、「嫌い群」との間で有意差が見られた( $p < .05$ )。

結果として、「英語で授業を行う」ことは、生徒の英語に対する動機づ

けと大いに関係があると考えられる。

### 4.3.3 英語の学力

7件法（①全然そうでない～⑦本当にそうである）で、英語の学力を生徒自身に尋ねた。下位群 59 人（回答①, ②）、中位群 39 人（回答③, ④）、上位群 34 人（回答⑤～⑦）であった。

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を従属変数とし、英語の学力を独立変数とする 1 要因（3 水準）分散分析を行った。

F1「雰囲気」において、主効果が認められた（ $F(2,129) = 6.03$ ,  $p < .01$ ）。ボンフェローニの検定による多重比較の結果、英語力「上位群」と「普通群」は、「下位群」と比べて、英語の授業の雰囲気を盛り上げるために、英語で授業を行って欲しいと思っているという結果となった（ $p < .05$ ）。

### 4.3.4 英語に対する好感度および英語の学力

各因子に収束した質問項目の回答値の合計を従属変数とし、英語に対する好感度および英語学力を独立変数とする 2 要因（それぞれ 3 水準）分散分析を行った。

どの因子に関しても交互作用において有意な差は見られなかった（ $p < .05$ ）。

## 5. 結果のまとめ

上記の結果をまとめると以下のようになる。

- ① 因子分析の結果では、英語の授業であるので「すべて英語でやるのが当然である」と考えているというよりはむしろ、授業の雰囲気づくりのために英語で授業を行って欲しいと考えている傾向にあっ

た。

- ② 男女による有意な差は見られなかった。
- ③ 進路に関しては、有意な差は見られなかった。
- ④ 英語に対する興味に関しては、英語「好き群」に、すべての因子において有意な差が見られた。
- ⑤ 成績に関しては、「下位群」に、雰囲気のための英語での授業は望まない傾向にあった。

## 6. 結 論

今回も、保坂（2018）同様、「英語で授業を行う」ことは、英語に対する興味が高い生徒が望む傾向となった。英語力との関連も考えれば、「英語で授業を行う」ことに固執すれば、英語嫌いを招き、それが英語力の低下を招く危険性があるように思われる。

従って、学習者の反応を見ながら適切に英語を使い、補助的に母語である日本語を使いながら授業を行うことが求められる。

高校生よりも中学生の方が、「英語での授業」が、生徒の動機づけに与える影響が大きいように思われる。

## 7. 今後の課題

今後の課題として以下のことが考えられる。

- ① 「英語嫌い」の多い高校の調査を行う必要がある。2016年の文部省の調査でも明らかのように、英語嫌いは増えている。全国の中学3年生約6万を対象に行った調査では、「英語が好きではない」と回答した割合は45.4%で、前年より2.2ポイント増加した。「英語が好きではない」と回答した理由は、「英語そのものが嫌い」が



33.7%と最も多かった。「英語嫌い」の実態を丁寧に明らかにするとともに、「英語での授業」が、どれくらい「英語嫌い」と関係があるのか明らかにしていきたい。同様にベネッセの調査でも、英語の人気は、2015年では最下位である (Benesse, 2017)。

- ② 質的研究の必要性がある。量的な研究では、英語「好き群」に特徴的な傾向が表れたが、質的な研究も行い量的研究の実証性を高める必要がある。

今後は英語力の高くない高校生を対象とした調査も望まれる。

### 謝辞

本研究にご協力いただいた埼玉県内のT中学校の生徒の皆さま、先生方に心より感謝いたします。ありがとうございました。

さらに拓殖大学言語文化研究所にも感謝を申し上げます。平成30年度の研究助成により資料の収集が可能となり研究が大幅に進展致しました。ありがとうございました。

なお、本稿は、『日本言語教育ICT学会研究紀要』(2019年3月発行)に掲載されたものを本紀要の書式等に合わせて若干修正したものです。今回、学会のご厚意により本紀要への転載が承認されました。記して感謝致します。ありがとうございました。

### 《注》

- (1) 福井県内の高校の教員のTETEの実践報告として、森(2013)は極めて興味深い。2011年度は100%英語で授業を行って失敗したので、2012年度は50%の英語使用にとどめ、生徒の意識を両者で比較した実践報告である。実証的な研究というよりも実践報告として、TETEの結果、学力の低下を招いたとは言えないなど大変興味深い分析を行っている。ただ、「必要に依じて」という命題には答えていないのは残念である。

### 主要参考文献

- 上西幸治(2011). 「『英語の授業は英語で行う』に関する一考察——英語教師・高校生の意識を中心にして」 *Setsunan Journal of English Education*. (摂南大学外国語学部研究紀要), 第5号, 115-141.

- 高木亜希子・酒井英樹・加藤由美子・福本優美子. (2016). 「英語で授業ができる中高教員が大切にしていること：インタビュー調査に基づいて」『中部地区英語教育学会紀要』45巻, 221-226.
- 土持かおり (2017). 「中学校における「英語で授業を行う」現状についての一考察」『鹿児島県立短期大学紀要』第68号, 53-67.
- Benesse. (2017). 「この25年間で子どもの好きな教科はどう変わった？」『教育情報サイト』Retrieved from <https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20170607-00010001-benesseks-life>
- 保坂芳男 (2017). 「「英語で授業をする」ことに関する研究——高校生意識調査から——」『日本言語教育 ITC 学会紀要』第4巻, 97-109.
- 保坂芳男 (2018). 「「英語で授業をする」ことに関する研究(2)——トップクラスの進学校生徒の意識調査分析——」『日本言語教育 ITC 学会紀要』第5巻, 117-127.
- 森一生 (2013). 「「英語の授業は英語で」は本当に可能か」『中部地区英語教育学会紀要』42巻, 45-52.
- 文部科学省 (2009). 「高等学校学習指導要領 第2章第8節外国語」Retrieved from [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm)
- 文部科学省 (2010). 『高等学校学習指導要領解説—外国語編・英語編』, 開隆堂.
- 文部科学省 (2017). 「中学校学習指導要領 第2章第9節外国語」Retrieved from [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383986.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm)
- 文部科学省 (2018). 『中学校学習指導要領解説——外国語編・英語編』, 開隆堂.
- 山村啓人 (2017). 「英語で行われる英語の授業を学生はどう捉えるか」『中部地区英語教育学会紀要』46巻, 79-86.
- 亘理陽一 (2011). 「外国語としての英語の教育における使用言語のバランスに関する批判的考察——授業を「英語で行うことを基本とする」のは学習者にとって有益か——」『教育学の研究と実践』第6号, 北海道教育学会, 33-42.
- ReseMon (2018年9月28日) 「中3の英語力調査, 半数近くが「英語嫌い」4技能のバランスに課題」Retrieved from <https://resemom.jp/article/2017/02/28/36823.html>
- Atkinson, D. (1993). *Teaching monolingual classes*, London: Longman.
- Brown, H. D. (2007). *Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy* (3rd ed.), White Plains, NY: Pearson Education.
- Harmer, J. (2001). *The practice of English language teaching* (3rd ed.), Harlow, UK: Pearson Longman.

- Takegami, F., (2016). An Exploratory Study on the Impact of the New Teaching English Through English (TETE) Curriculum Policy in Japan: A Case Study of Three Teachers. *International journal of social and cultural studies*, 9, 15-45.
- Shin, Sang-Keun (2012). “It Cannot Be Done Alone” : The Socialization of Novice English Teachers in South Korea. *TESOL Quarterly*, Vol. 46 (3), 542-567.

(原稿受付 2019年12月12日)